

くらしナビ・ライフスタイル

親子の出会い、絵本で告知

カルチャー | 本・書評 | 朝刊くらし面

毎日新聞 | 2023/9/9 東京朝刊

絵本の会



絵本「ねえ、しってる？」（見本版）の最初のページ

第三者の提供精子を用いた人工授精（AID）を受けた夫婦が、生まれてくる子どもに事実を包み隠さず伝えられるよう支援する取り組みを、東京の不妊治療施設「はらメディカルクリニック」が始めた。鴨下桂子副院長が京都市在住の絵本作家、よしだるみさんとコラボし、絵本「ねえ、しってる？」を制作。当事者夫婦が自分たちで考えた子どもへのメッセージも盛り込み完成させ、今秋から配布する。

●不妊治療施設と作家



絵本の作成会で「テリング（告知）への一歩を踏み出して」と呼びかける、はらメディカルクリニック

読み聞かせを通じ、幼少期から自然な形で告知できるようにする。鴨下副院長は「告知の重要性と向き合い、支援することもこの治療の一部。絵本作成の機会を通し、ご夫婦が一歩を踏み出す力になってほしい」と話す。

8月20日、都内で開かれた絵本の作成会には41組の夫婦が参加した。同クリニックで治療を受けて出産したか、妊娠中の女性と夫が対象だ。

一般社団法人「AID当事者支援会」代表理事の寺山竜生さん（50）が妻と共に登壇し、4歳の娘への告知体験を紹介。成長するにつれて緑

り返し質問するようになったり、逆に話を聞くのを嫌がったりと、変化を経て娘が事実と向き合っていく様子を振り返り「子どもとの関係で、うそ偽りがあるてはいけない。提供精子という事実をタブーにするのではなく、子どもを信用して話してあげて」と訴えた。

●各家庭だけの一冊に



絵本作家のよしだるみさん = 共同

絵本は「ねえ、してる？ ○○ちゃんはパパとママのたからものねえ、してる？ わたしたちはどうやってであえたのか」という語りかけで始まる。パパが「いのちのたね」を持っていなかったため、病院で「しんせつなひと（ドナーさん）」から分けてもらって家族になるストーリー。実際の子どもの名前や、子どもへのメッセージを入れて製本し「各家庭だけの一冊」（鴨下副院長）となる。

作画を担当したよしださんは「家族の絆の根っこを作るお手伝いができればうれしい」と話す。

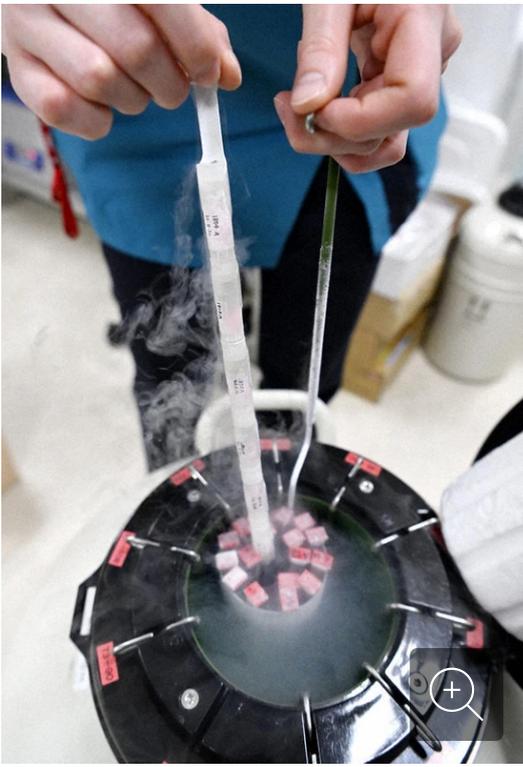
作成会に参加した30代の夫婦は「生後6カ月の子どものかわいさあまり『告知しなくても』と思ってしまうが、子どもの立場を第一に考える必要がある」「関係が変わってしまわないかと思うと勇気がいるが、自分たちも告知してみよう」と改めて思うことができた」と感想を口にした。

AIDは国内で70年以上の歴史があるが、生まれた子どもが望んでも精子提供者の氏名や住所といった情報が開示されることはない。出自を知る権利の観点から問題点が指摘され、超党派の議員連盟が昨年、開示ルールを盛り込んだ新法骨子案をまとめたが、法制化は実現していない。

■ことば

提供精子を用いた人工授精（AID）

無精子症などのため子どもができない夫婦に、第三者から提供された精子を用いて人工授精を試みる医療。慶応大病院で1949年に最初の赤ちゃんが誕生、これまでに国内で1万人以上が生ま



「はらメディカルクリニック」で不妊治療に使用するため凍結保存された提供精子 = 東京都渋谷区で
2023年2月撮影

れたとされる。日本産科婦人科学会の集計によると、2020年には12医療機関で計2010件実施された。提供者の氏名などの情報にアクセスする仕組みはないが、近年、この医療で生まれた人たちが「遺伝的ルーツを知りたい」と声を上げ、出自を知る権利の重要性が認知されるようになった。

毎日新聞のニュースサイトに掲載の記事・写真・図表など無断転載を禁止します。著作権は毎日新聞社またはその情報提供者に属します。画像データは(株)フォーカスシステムズの電子透かし「acuagraphy」により著作権情報を確認できるようになっています。

Copyright THE MAINICHI NEWSPAPERS. All rights reserved.